

## 二朗の大學合格

二朗が中学校を卒業し、高校は県立第一高等学校に合格、入学式には私が出席した。校長先生の訓話の中に、「当校に入学した生徒の殆ど全員、大学に進学する者ばかりである」との言葉があった。私はビックリ。長い間子供を育てて来て子供を大学に進ませると考えた事は、一度もなかった。当時一族で大学に入った者は一人もない。

家電販売、修理、電気工事を業として生活して来た。ゆくゆくは、長男洋一は電気工事の事に、二朗は、弱電、テレビ、冷蔵庫などの家電関係の仕事を、と親子して店を発展させたい希望であった。

入学式を終え家に戻り、入学式の模様を妻に話し二人で話し合い、大学に進学させる事に決心した。

国立大学ならいざ知らず、あの当時五〇万円位の入学金が必要だ。蓄えは無い。二朗が大学に入る迄の三年間に五〇万円になるよう、積み立て貯金しよう、と早速三年満期の定期預金に入った。

洋一は私の希望通り、仙台市立工業高等学校電気科に入学、三年生になっていた。次の年、洋一は東京電子工学院電気工学科に入学。二年課程を終了する春、二朗の大学入試の挑戦が始まった。

親の気持ち进行い、国立大学に絞っている。滑り止めの私立の大学は見向きもしない、筑波大学一本やりである。毎晩朝二時、三時まで勉強して、学校に遅れず、小遣いで買った中古のバイクで通学している姿を見ると、私達は神に祈りたい気持ちになる。

正月になって櫛ヶ岡天満宮に合格祈願の朝参りが始まった。櫛ヶ岡天満宮は、学問の神様。拜殿の前には、合格祈願の絵馬が無数に奉納してある。

それから、大雪で行けなかった日は二日だけ、約三ヶ月、往復徒歩で一時間かかるお参りを続けた。寒い日、風の日、雪の日、辛いとは一度も思わなかった。

筑波大学に願書を出し、二朗は勉強に熱が入る。担任の先生も心配し、「東北大学だったら、大丈夫、こちうに変更する様説得して下さい」と電話をよこす。先生が云っても、私達が云っても、二朗の決心は変わらない。二朗は目標を決めている。

いよいよ受検日が来た。東京の義妹(よっこちゃん)に世話になり一泊、心尽くしの弁当を作って貰い、試験場に行った。夕方、身も心も疲れ果て、弁当もあまり手を付けず帰って来た。と義妹から電話があった。一次試験を終え、一週間後の二次試験に控え、今度は洋一の所に泊ることになった。

二次試験日は二高の卒業式の日だった。妻が出席、担任の先生に御礼を申し上げ、卒業証書を書いて帰ってきた。

合格発表はもう一人の義妹(こうちゃん)にお世話になり一緒に見に行ってくれた。私と妻は朝から仕事に手がつかない、今か今かと電話の来るのを、そわそわして待ち侘びた。あんな心情は生まれて初めてである。私が店の裏口に居た時電話のベルの音が聞こえた、妻は何も言っ来ない。

少したって「合格したんだって」とやっと絞り出した声が聞こえた。その瞬間私の足はくたくたになり、その場に座りこんでしまった。妻の元に行くのに立って行けず、這ってやっと辿り着き、手を取り喜び合った。妻も合格の知らせを受けても、声が出ず立って居られなかったそうだ。

私達の忘れられない真実である。

天満宮には翌朝お礼参りに行き、長かった参拝に終止符を打った。近くにありながら、お宮にはご無沙汰している、二人で参拝に行きたいと思っ。

洋一の時も、二郎の時も入学式には私が参列した。洋一が工学院を卒業すると同時に二郎が入学した。金銭的に楽でなかった私達に、親孝行して貰った。在学中もよその学生の半分位しか送金しなかったが、不満は一度も聞かなかった。

あの時は本当に嬉しかった。平沢の両親も、矢附の両親も心から祝ってくれた。孫で初めての大学入学である。それも国立大学だ、涙を流して喜んでくれた姿が目に見え。

平成十四年八月二十七日



合格発表の日こうちゃんの家で